

主はよみがえって使徒たちに現れる

ルカ福音書24:33-43

(新改訳2017訳)

- 24:33 二人はただちに立ち上がり、エルサレムに戻った。すると、十一人とその仲間が集まって、
- 24:34 「本当に主はよみがえって、シモンに姿を現された」と話していた。
- 24:35 そこで二人も、道中で起こったことや、パンを裂かれたときにイエスだと分かった次第を話した。
- 24:36 これらのことを話していると、イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。
- 24:37 彼らはおびえて震え上がり、幽霊を見ているのだと思った。
- 24:38 そこで、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを抱くのですか。
- 24:39 わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。幽霊なら肉や骨はありません。見て分かるように、わたしにはあります。」
- 24:40 こう言って、イエスは彼らに手と足を見せられた。
- 24:41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっていたので、イエスは、「ここに何か食べ物がありますか」と言われた。
- 24:42 そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、
- 24:43 イエスはそれを取って、彼らの前で召し上がった。

【祈りながら考えよう】

- (1) 甦られた主イエスの体は、どのような特徴がありますか。
- (2) イエスが与える平安は、世が与える平安とどのように違いますか。
- (3) イエスはなぜ、弟子たちに手と足と脇腹を見せられたのですか。

【解説】

(1) 主は甦ってシモンに現れた

《二人はただちに立ち上がり、エルサレムに戻った。すると、十一人とその仲間が集まって、「本当に主はよみがえって、シモンに姿を現された」と話していた。》

①主の復活の体の特徴

エルサレムの弟子たちの所で、主の復活が話題として語られているところであった。そうしてみると、エマオの道を二人の弟子たちと歩かれた復活のイエスは、エルサレムでもペテロにご自身を現されたということになる。そこに甦りの主の復活の体がどういうものか私たちに示されている。

イエスの復活体は、もはや時間、空間というものに制限されない自由な体であるということである。一人に出会っていると他の人には出会えないというような、不自由な制限された肉の体とは異なる。

エマオの道を歩き、同時にエルサレムにあってペテロに現れるという、同時に何人にでも出会うことのできる、そういう自由な体である。イエスの復活体の性質がこのことで知られる。

②パウロとルカの記録が一致している理由

ルカ福音書によると、復活のイエスにお会いした人たちの順序は、まずエルサレムにおいてシモン・ペテロに、あるいは同時に、エマオ途上の二人の弟子、それから他の弟子たちとなっている。

これは、Iコリント15章5-6節の、復活のイエスが弟子たちに現れた順序と同じである。《また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたことです。その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました》と記されている。

ルカ福音書と、パウロのIコリント15章の順序が一致しているのは、ルカはパウロの弟子であり、パウロから様々な聞かされていたからである。

ヨハネ福音書、あるいはマタイ福音書によると、一番最初に復活のイエスに出会ったのは女の弟子たちで、特にヨハネ福音書20章によると、マグダラのマリアである。しかしルカには、この女の弟子たちは最初にただ空っぽになっている墓を見て、御使いにイエスの復活を告げられて、そのことを弟子たちに知らせただけが記してあって、その女の弟子たちがイエスに出会ったということは述べていない。

なぜマグダラのマリアの経験がルカには述べられていないのか。それは当時の女の弟子は、いつも陰の出来事としてあまり表だって出されていない。男の弟子たちの経験が多く表側に出ている。しかし最初に主に出会ったのは、マグダラのマリアであったことは疑うことのできない事実である。各福音書は相補いあっていくものである。だから、4つの福音書が私たちに与えられているわけである。

(2) 語り合う中にお立ちになる主

《そこで二人も、道中で起こったことや、パンを裂かれたときにイエスだと分かった次第を話した》
エマオの二人の弟子たちも、みんなに自分たちの経験を胸弾ませながら一生懸命語った。

《これらのことを話していると、
イエスご自身が彼らの真ん中に立ち》

イエスのことが語られる所、そこにイエスはおいでになる。イエスはその話の最中にご自身を現された。わからない者たちの心を開くために諭し、ご自身をわからせようとなさる。昔も今も同じである。

二人または三人が語る所でも、あるいは十人、百人、二百人でイエスのことが語られる所、必ず主はそこにおられる。



(3) 御国を継がせる力ある言葉

《ですから、私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがた一人ひとりを訓戒し続けてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。今私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができるのです》
(使徒20:31-32)

パウロが伝道旅行の帰路で、エペソの教会の監督者たちを集めて、別れの言葉を述べている。パウロはエルサレムに向かっている。エルサレムでは狂暴な迫害者たちが彼の来るのを待っている。エペソの信者たちと再び相見ることができなくなるかもしれない。私は去るが、《今私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます》と言っている。

《みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができるのです》

御言葉を聞き、御言葉を受け入れる者の中に成長させ、御国を受け継がせる力を、御言葉自体が持っているということである。この世の聖人、この世の教師の語る言葉は、その言葉を基準として、それを聞く者が自分の力でそれに到達していかなければならない。自分で働いてその言葉を自分の中に実現させなければならぬ。その働くものは自分の力である。だから力の無い者は、いくら素晴らしい言葉を聞いても、全然自分のものにならない。

しかしイエス・キリストの言葉は全く異なる。イエスの言葉は、御言葉自身に神の国にまで至らせる力がある。御言葉自身が、これを受け取っていく者の内に働いて、実現するのである。私たちが実現するのではない。御言葉自身が私たちの内にあって実現していくのである。それがイエスの生きた言葉である。

(4) 御言葉と共に働かれる主

上記のことがマルコ福音書16章19-20節に記されている。

《主イエスは彼らに語った後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた》
弟子たちは甦られたイエスを見、イエスを信じ、この主イエスをそのまま伝えに行った。《いたるところで福音を宣べ伝えた》とある。

《主は彼らとともに働き》、その福音が伝えられる所に復活の主は共に働いておられる。御言葉自体に力があるということをも《みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた》とある。

今日の出来事でもある。私たちが主の御言葉を聞いていくなら、私たちの中に御言葉通りのことが実現されていく。《これらのことを話していると》というこの一句、イエスのことが語られている所、そこにイエスが忽然と現れ、そして生きた働きを現しなされる。イエス様のことを話し合うということが、こよなく楽しいことになってくる。

(5) イエスが与える平安

《すると、イエスが来て彼らの真ん中に立ち、こう言われた。「平安があなたがたにあるように。」》(新改訳2017)
《これらのことを話している間に、イエスご自身が彼らの真ん中に立たれた。》(新改訳改訂第3版)

①不安の中にいた弟子たち

上記の36節は新改訳2017では「平安があなたがたにあるように」が追加されている。それはベザという権威ある写本(ベザ・ケンブリッジ写本ともいう。記号はD。5世紀頃に書かれたと推定される新約聖書大文字綴本写本。フランスの宗教改革者・神学者カルバン(1509-1564)の友人I.ベザが1581年ケンブリッジ大学へ寄贈したところからこの名がある。内容は4福音書と「使徒の働き」で、ギリシア語テキストとラテン語の翻訳があり、おそらく西方で書かれたと思われる)の中にこの言葉がないからである。

これは他の福音書から書き写す際に挿入されたものと解釈されている。問題の場所であるから口語訳では括弧で囲んでいる。しかし他の福音書にあることだから真実である。この言葉は、ヨハネ福音書20章19節後半から写されたものと考えられる。ヨハネ20章19節、

《その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。すると、イエスが来て彼らの真ん中に立ち、こう言われた。「平安があなたがたにあるように。」

「平安があるように」、これはユダヤ人の挨拶ヘブル語「シャローム」(Eイレーネー)である。私たちが人に会えば

「こんにちは」と挨拶する。よその家に行った時に「ごめんください」と言って入る。あるいは「さようなら」と言って別れの挨拶をする。ユダヤ人たちはすべてこの「ハシャローム（平安があるように）」で挨拶をしていた。

しかし主イエスの「平安があるように」は、単なる挨拶ではない。弟子たちは、主を失ってまさに不安の中にあった、ユダヤ人たちの恐れ、戸を閉じて中に入っている弟子たちにとって、心に響く「平安があるように」である。

死んでしまったと思ったイエスが、死に打ち勝って甦られた。このイエスにあって、もはや何の不安があろう。心底から、平安あれ、安かれ、と言うことができる。イエスは復活の身をもって、弟子たちに「平安があるように」と言われた。今日もまた私たちの集まる所に主はおられて、「平安があるように」と言って下さる。

主がいっさいを担い、いっさいを支えて下さる。私たちはこのままで、心底から平安であると言うことができる。

この平安こそ、イエスが《わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。》(ヨハネ14:27)と言われた平安である。

②世が与える平安

世が与える平安は、事態が変わればたちまち不安になる。健康に寄り頼んだ平安は、健康が失われれば、不安のどん底。物や財産に頼った平安は、それが失われれば、不安のどん底。人に平安の根拠を置いている者は、人との関係が少しでも変わると、不安のとりこになる。それがこの世の平安である。心底から本当の平安というものはそこに見いだすことはできない。

③イエスが与える平安

イエスの与えて下さる平安はそんな平安とは全く質が異なる。人間最後の敵である死、人間にとってはいっさいの可能性を足元から全部奪い取ってしまうところの死、この死を通り甦られたイエス・キリストが、その死に対する勝利において私たちを守り、私たちに与えて下さる平安である。イエスに根ざす平安である。

十字架のこちら側の平安では、イエスでも駄目である。それは弟子たちと同じく不安である。イエスが十字架にかかって死んでしまったら、たちまち吹っ飛んでしまう平安である。

弟子たちは、甦られたキリストに根ざす平安を、イエスから宣言されている。この平安を破るものは誰もいない。死も破ることはできない。《平安があるように》この一句に、何ものにも揺るがない大平安が宣言されている。

(6) 愛の叱責

《彼らはおびえて震え上がり、幽霊を見ているのだと思った》

幽霊を見ていると思った。イエスのお姿がまざまざと（はっきりと）明らかに見えたからである。薄ぼんやりした、あるいは瞬間のひらめきのような出来事であれば、驚かないかもしれない。しかしまざまざと見える姿で、しかも戸を閉じた家の中に忽然と現れたイエス。弟子たちにとっては、一瞬恐怖に思えた。おびえて震え上がったとある。

もちろんその中には、エマオ途上において復活の主を経験した二人がいるし、また復活の主に出会ったというシモン・ペテロがいる。その事を話している最中のことである。しかしそのイエスの姿が、そこにまざまざとあまりにも明らかに現れ見えた時、弟子たちの心の中に恐れと驚きとが満ちた。

復活ということは、人間の常識、経験では簡単には受け取れない出来事だということ。いくら話を聞いても、今見て来たとき聞いても、いざそれを目の前にした時には、簡単には受け取れない。復活ということは、話では聞けるが、目の前に見る時に、驚くべきことであろう。

《そこで、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを抱くのですか」》

これはマルコ福音書16章14節では、次のような言葉で表している。

《その後イエスは、十一人が食卓に着いているところに現れ、彼らの不信仰と頑なな心をお責めになった》

エマオの二人の弟子たちが主を見た、ペテロも主を見たと話している。しかし他の弟子たちは、受け入れられない。だからイエスはご自身をみんなの前に現されたのである。このことで、ああ本当だったと喜んで、喜びに満たされるのが当たり前なのに、彼らは恐れ、驚きに満たされた。

彼らの心が、エマオの途上でもイエスが二人の弟子に語られたように、聖書の言葉がわかっていなかったからである。聖書の言葉を確かに読んでいた、聞いていた。イエスに3年も師事してじかに聞いた。けれども結局、自分の判断で受け取っていた。だから本当のことがわかっていない。

復活はとても自分たちの理解に入らないこと、いくらイエスが語られても、聖書をもって諭されても、自分のものとしてピンとこない。そこに彼らの不信仰があった。どこまでも自分の経験に立って聞いている、彼らのかたくなな心があった。それをイエスはお責めになった。

しかしイエスの責められることは、決して弟子たちを憎んでのことではない。愛するがゆえのことである。どうして目の前に現れているこの事実を、そのまま受け取れないのか。どうして信じられないのか。イエスはせつないほどの思いを持って、何とかしてわからせたいがゆえの叱責である。愛の責めである。

これは今日も同じである。色々な出来事を通して、具体的に、あるいは御言葉をもって、不信仰なかたくなな私たちの心をイエスは責めて下さる。叱って下さる。そして何とかしてでもこの事実をわからせ、受け入れさせたいのである。

(7) 手と足と脇腹の傷跡を見せて

《わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。幽霊なら肉や骨はありません。見て分かるように、わたしにはあります》

イエスは責めるだけではなく、ご自身の手や足を差し出して、何がなんでもこの事実を見させようとなさる。なぜ手と足をお見せになったのか。なぜ手や足を見るとイエスだということがわかるのか。

イエスの手には生々しい大きな釘の跡がある。足にも釘を打ち込まれた痛々しい傷跡がある。その釘跡のある手と足である。なぜ復活のイエスに傷跡がそのまま残っているのか。復活の体は栄化されたすばらしい体に変えられている。なのに、なぜなおも痛々しく肉の体と同じに手や足に傷跡があるのか。

イエスのこの手足の傷は、人間が罪から贖い出されたしるしである。イエスがこの罪の人のために代わって死んで下さった十字架のしるしである。だから人間の罪が完全に贖われるまで、イエスの手と足の傷はいえないのである。

イエスはその手足を示して、これを見なさい、あなたのために死んだ十字架のしるしだ、お前はもうわたしで死んでいるのだ。なぜ罪に悩むのか。なぜ自分の弱さにとらわれているのか。もう古い自分から完全に解放されているのだ。そのしるしがこの手足の傷だと、私たちを諭し、励まして下さる。

(8) 手応えある復活の体

《幽霊なら肉や骨はありません。見て分かるように、わたしにはあります》

幽霊だったら何の手触りも、手応えもない。しかし、さわってみなさいと言われる。さわって、その手応えがある。肉の体に返ったのではない。肉の体と全然無関係な体でもない。イエスの体は単なる霊だけのものではない。その肉の体が復活の体に変えられた。肉の体に対して、霊の体に甦った。その体はたしかに手応えのある体である。肉体とは違うが、手応えのある体である。

《こう言って、イエスは彼らに手と足を見せられた》

これも括弧で囲んである。これもヨハネ福音書20章から書き写されたものようである。ヨハネ20章20節に、

《こう言って、イエスは手と脇腹を彼らに示された》とある。

《手と脇腹》が、ルカでは《手と足》になっている。先に、わたしの手や足を見なさいと言われているから、そのまま《手と足を》となっている。

復活のイエスは、手と足と脇腹をお見せになったに違いない。私たち罪人に代わって死なれた死を表す、イエスのあの手足の傷跡、槍で突かれた脇腹のあの痛々しい傷跡、イエスの復活体にはなおその傷が大きく口を開いていた。私たちが贖ったその生々しい傷跡である。

もしイエスの手に傷がつけられなかったら、足が傷をつけられなかったら、脇腹が槍の突き跡を受けなかったら、私たちはどうなっていたのか。

私たちはいっさいの罪の償いをこの全存在で受けなければならない。私たちにふさわしいのは、永遠に呪われた地獄だけである。

しかしイエスはこの手で、この足で、この脇腹で受けとめて下さった。イエスの全存在で私たちの呪いを受けて下さった。刑罰を受けて下さった。

(9) 主の愛なる迫り

《彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっていたので》

いかに人間というものは信じにくい者か。それかと言って、非常に信じやすい面も持っている。つまりん事はすぐ信じる。そして、だまされたの、どうのこうのとわめく者である。

しかし信すべきことに対しては、なかなか信じられない者。あまりに喜ばしいことに会うと、夢ではないかと頼をつねってみたくなる。

弟子たちにとって、この上なく喜ばしいこと。十字架に死なれて、もうだめだと思っていた。その失望が大きかっただけ、イエスが甦ってここに立っておられる。こんな喜ばしいことがあるか。その喜びがあまり大きすぎて容易に信じられない。そういう弟子たちの心境であった。

《イエスは、「ここに何か食べ物がありますか」と言われた》

信じられない弟子たちに対して、どこまでも信じさせようとして迫られるイエスである。

《そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと》

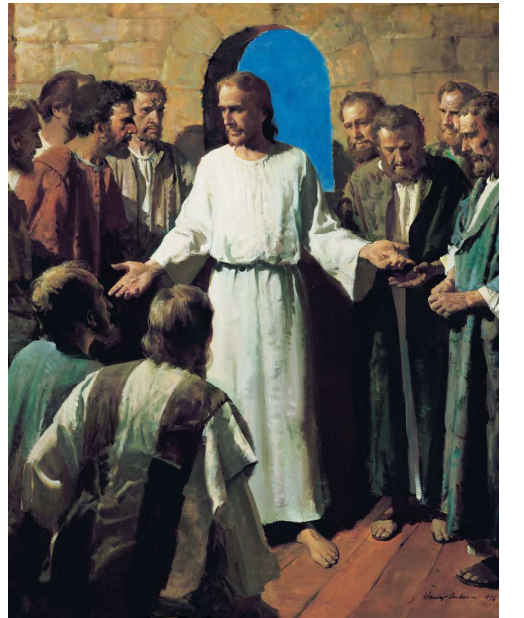
これはたぶん弟子たちの食事の最中か、食後の出来事か、そこに焼いた魚の一切れがあるということで、食事に関係のある場所であったと考えられる。

《イエスはそれを取って、彼らの前で召し上がった》

復活のイエスが復活体をもって、この肉の体の食べ物を食べられた。ここでも復活体の自由自在なる性質というものを示されている。時間、空間を超えた復活体、また肉の食物をも食べようすれば食べることができる。

イエスはみんなの前で、差し出された魚一切れを召し上がった。これは自分が腹が減ったから食わせろというのではない。何とかしてイエスの復活体をまともに見せるため、弟子たちに本当に信じさせるためである。イエスの復活体がどういふものか、幻みたいなものではないことをみんなに示すためである。

ご自身のことをわからせたい、その切願のゆえに、イエスは魚一切れを食された。疑う者、受け入れられない者には、その手をとってわからせようとなさる愛なるイエス様の熱心。その迫りをここに見ることができる。



J-ばいぶるGREEK 原書講読画面

ルカ 24:36

Ταῦτα δὲ αὐτῶν λαλούντων αὐτὸς ἔστη ἐν μέσῳ αὐτῶν καὶ λέγει αὐτοῖς,
Εἰρήνη ὑμῖν.

<文法解析ノート> Luk 24:36

- [1] οὗτος Ταῦτα apdan-p 指示)対中複 このこと [2] δέ δε cc 接)等位 さて、そして、次に、しかし
[3] αὐτός αὐτῶν nprgm3p 代)属男3 彼・それ(三人称の代名詞)、自身(強調用法)、同じ、まさに
[4] λαλέω λαλούντων vppagm-p 分)現能属男複 話す
[5] αὐτός αὐτὸς nprnm3s 代)主男3 彼・それ(三人称の代名詞)、自身(強調用法)、同じ、まさに
[6] ἴστημι ἔστη viaa--3s 動)直ア才能3 立つ、立たせる、現れる
[7] ἐν ἐν pd 前)与 中に、間に、で、よって、に、 [8] μέσος μέσῳ ap-dn-s 指示)中単 中央の、中間の、中の。
[9] αὐτός αὐτῶν nprgm3p 代)属男3 彼・それ(三人称の代名詞)、自身(強調用法)、同じ、まさに
[10] καί καὶ cc 接)等 そして、～さえ、しかし、しかも、それでは、そうすれば
[11] λέγω λέγει vipa--3s 動)直現能3 告げる、言う、呼ぶ、命ずる
[12] αὐτός αὐτοῖς, npdm3p 代)与男3 彼・それ(三人称の代名詞)、自身(強調用法)、同じ、まさに
[13] εἰρήνη Εἰρήνη (エイレーネー) n-nf-s 名)主女単 平和、平安
[14] σύ ὑμῖν. npd-2p 代)与2複 あなた

<聖書翻訳比較ノート>

【新改訳2017】 これらのことを話していると、イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」 と
言われた。

【新改訳改訂3】 これらのことを話している間に、イエスご自身が彼らの真ん中に立たれた。

【口語訳】 こう話していると、イエスが彼らの中にお立ちになった。[そして「やすかれ」と言われた。]

【新共同訳】 こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われ
た。

【LIB改訂】 これらの話をしている時、突然イエスが現われ、みんなの真ん中に立たれたのです。

【NKJV】 Now as they said these things, Jesus Himself stood in the midst of them, and said to
them, "Peace to you."

【TEV】 While the two were telling them this, suddenly the Lord himself stood among them and said
to them, "Peace be with you."

【KJV】 And as they thus spake, Jesus himself stood in the midst of them, and saith unto them,
Peace be unto you.

【NIV】 While they were still talking about this, Jesus himself stood among them and said to them,
"Peace be with you."